
後払いの契約

まがりまめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

後払いの契約

【Nコード】

N9685P

【作者名】

まがりまめ

【あらすじ】

蓮冬治の前にあらわれた奇妙な男――

蓮家の隆盛の歴史とその裏に隠された契約

その契約に冬治はなすすべもなく巻き込まれていく……

白い息が空に千切れた。後ろに流れていくそれを目で追うひまもなく、新たな犠牲者をはきだしては千切り、吐き出しては千切っていた。文句一つも言わない、ほんの一瞬前には俺に包まれていた、空気。ゆるやかな坂にさしかかり、目の前に見える短い横断歩道を右折した。とたん、大通りの喧騒（といっても田舎だから、車の通る音が主だ）から逃れ、山を切り開いて作った谷のような道にでる。両側は、お墓。うちの家の墓もこの山の中にある。かなり古くからこの山は死者が埋葬されてきたらしく、古そうな墓石に目を凝らしてみようと、明治何年没、なんてのもあった。死んだ年と照らし合わせてみると、江戸時代生まれの人もいた。この町は俺の曽祖父母が若い頃、かなり栄えた所だったらしい。今となってはそんな名残は何処にも残っていない老人ばかりの町であるが。

ふいに大通りに戻るのは面倒になり俺はそのまま両側を墓に囲まれた急な階段を上り始めた。そうだ、折角此処まできたのだから、ご先祖様に挨拶でもしていこう。自分の家の墓の位置を、正確に記憶しているわけではなかったが、なんとなく行く筋ものびた道を進んでいくと、我が家の墓にたどり着くのだ。小さい頃から何度も来ているから、身に染み付いてしまったのかもしれない。ガタガタになった石の階段を危うい足取りで駆け抜け、いくつかの墓の前を、走って通り過ぎる。こんなとき、ちらりと古い墓が目に入ってしまう、何故か俺はそれにすこし頭をさげてしまう。回りの墓とは違う、手入れされていない背の高い雑草と、木に囲まれたくすんだ石。跡継ぎの子供がいなくなってしまったのだろうか、それとも引越してしまっただけ、忘れられてしまったのだろうか。「ほら、見てみる。こんな墓にだけ、絶対に木が生えているだろう？何でだと思っ？」「なんで？」「死んだ人の、栄養を吸って木がよく成長するんだよ」そういって、父親から脅かされてたっけ。

はちす

蓮家累代之墓。墓石にその文字をみとめて、四角い囲いの中に入る。軽く頭をさげてから、横においてある簀を取り、墓の中に落ちた松葉をはき始めた。誰に頼まれたでもない、なんとなく墓に来たらいつもやってしまう行為。「まったく、冬治は良い子に育ったねえ」そんな死者のつぶやきが墓の中から聞こえてこないかと、想像しながら、何で曾祖父はわざわざ松の木が覆いかぶさったように生えているこの地に墓を立てたのだろうかと思う。まだ、他にも土地はあっただろうに、これでは松の葉を受け止めているような按配で、掃除が大変だとは思わなかったのだろうか。いや、もしかしたら掃除のことなど考えなかったのかもしれない。なんたって、曾祖父の時代の我が家には、お手伝いさんがいたらしいから。もちろん、今の我が家は至って普通の家族構成だ。両親に兄が二人、そして、俺お手伝いさんがいるなんて、考えただけで嫌だ。他人が自分の生活空間に入ってくるなんて、居心地が悪い。

ざっとはわき終わり、簀を置いて墓石の前に手を合わせようとした。この中に靈魂が宿っているなど、これっぽっちも信じていないが、「こんにちは」と呼びかけて、最近の出来事を胸の中でポツポツと唱えるのが常だった。ただ手を合わせるだけでは、味気ない感じがするし、もし本当にこの中に祖父や祖母がいたのなら、孫の話はきくと喜んで聞いてくれるだろうと思ったから。手を合わせ目を閉じると、冷たい風がびゅうと横合いから吹いてくる。寒い。此処の所、雨が降って急に気温が下がった。虚勢をはって、半そで半ズボンで通してきたが、そろそろランニングウェアも変えたほうがいいのかな、そう思いながら「こんにちは」と胸のうちでつぶやいた瞬間。

「こんにちは」

ふいに、後ろから返事がした。聞き間違いか、反射的に振り返ると、そこには男がいて、俺のほうをじっと見つめていた。

「・・・こんにちは」

誰だろう。田舎だから知らない人に挨拶ぐらいされることは多々

ある。しかし、これはそのいきずりの挨拶とは違う物を感じた。振り返ったままの姿勢で、俺は少し首を傾け、もしかしたら不審者かな、つかみかかってきたらどうやって逃げようかなど思いながら口元だけで愛想笑いを浮かべた。もしかしたら、近所の人かもしれない。近所の人で俺を知っている人に、友達以外こんなに若い人はいないはずだけど。

「蓮家の子かい」

男も口元に微笑を浮かべ、首を傾けた。よく見れば、どこか古臭い印象がする。おそらく年は三十代の前半であろうに、何故だろうか。

「はい。」

親戚の一人だろうか。振り返ったままでは失礼かと思い完全に振り返ると、彼は失礼、と言つて墓の囲いの中に入ってきた。面食らつてみると、彼は墓石を見上げ、一礼すると「約束を果たしてきました」と言う。あやしい、これは逃げたほうが賢明ではないかと思ひながらも俺は男から目を離さず、しかしいつでも走り出せる構えていた。男は懐かしげな様子で数秒の間墓石を見つめると、緩やかな動きで向き直り、俺の目を覗き込むようにじつと見つめた。

「君は蓮正毅の曾孫さんにあたるのかい？」

「そうです、けど」

そうだ、何故古臭い印象がするのか、分かった。彼の服装だ。黒いズボンに真っ白なシャツ、サスペンダーに手には黒い蝙蝠傘を持っている。そして、よく見ると顔は日本人の顔ではなかった。いや、はじめこそ注意してみなかったのだが、どちらかと言うと、西洋人のそれである。

「名前は、なんていうんだい？」

あやしい、確実にあやしい。全く知らない人だ、きっと縁者でも知り合いでもなんでもない。俺はじりじりと後ずさり、男をにらみつけた。

「すみません、どなたですか？」

こんなことを聞くよりも、はやく逃げてしまったほうがいいのか
もしれない。しかし、もし知り合いだった時に、かなり失礼なこと
になってしまう。いや、それよりも、不審者が目の前にいる、とい
うシチュエーションに少しだけだが好奇心がうずいていた。俺が
警戒心をむき出しにすると、男は目を見開き（緑と茶色が混ざった
ような瞳の色をしていた）何かに気づいたように口をキュッと引き
締め、「ああ」と短く声をもらす。

「曾おじいさんから、何も聞かされていないかい」

「曾おじいさんって・・・貴方、知り合いなんですか？」

曾祖父は俺が生まれる前にもうなくなっていた。写真で姿を見た
ことはあるが、実際にあったことはない。目の前にいる三十代前半
多く見積もっても三十代後半の男が知り合いである可能性は極めて
低かった。すると、男は瞬きをして、さも当然そうに、

「そうだ」

といったのけた。その後、ふっと微笑を消し、一瞬真顔になった
かと思うとふむ、片手であごをさする。しかし、視線はずっと俺か
ら離さない。

「船員さんですか」

曾祖父は船会社を経営していた。もしかしたら、そのときに船に
乗っていた従業員かもしれない、自分でも違うだろうとは思いな
がらも、それしか筋の通る答えはない。いくらなんでもこの顔で血縁
者はないだろう。

「いいや」

「じゃあ、どういう知り合いなんですか」

「しいて言うならば、取引相手かな」

「取引相手？」

「ああ。そして友でも好敵手でもあった」

ますます意味が分からない。これは、逃げ出したほうがよさそう
だ。そう思った瞬間、俺は墓の囲い乗り越え、一目散に階段を駆
け下りた。全力で道路に向かって走り、そのまま左折して大通りに

でる。ここならまだ助けが呼べる、しかしまだ恐ろしくて大通りを少し走った後、やっと後ろを振り向く余裕ができた。激しく息を切らしながらもちらりと後ろを振り返ると、そこには誰も追いかけてくる気配はない。一応用心して、息が整うまで墓場に入る曲がり角をじっと凝視していた。それでも先ほどの男は現れなかったので、今度こそほっとして家路についた。ただ、やはり全力で一番の近道を走って帰った。

「でさ、本当びっくりして、走って逃げた」

夜。夕飯を食べながら、俺は墓場であつた男の事を家族に話した。一番上の兄は大学生で、一人暮らしをしているから、家にはいない。真ん中の兄と、俺と、父と母。

「やあね、何もされなかった？もう今度からお墓いっちゃだめよ、今の世の中男の子でも何されるか分かったもんじゃないんだから」
母が心配そうに、目を見開く。

「しっかし変わった奴だな、名前まで調べてたんだろ？」

兄は奇怪な事件だとだけ捉えたらしい。にやにやと笑って、「何もされなくて良かったな、冬冶。逃げたのは正解だよ。今度俺もいつてみようかな」などと言い、俺の背中をパシンとたたく。俺も墓場での恐怖は何処へやら、にやりと笑い、「今度一緒にいくか？」などと嘯いた。

「気持ち悪い人がいるものね。しかも外人さんでしょう？何処でうちのこと調べたのかしら。ねえ、お父さん？」

そのとき。ちらりと、父の顔に緊張が走っているのが見えた。しかしそれは一瞬にしてかき消され、母に向かつて「そうだな、外人っていうのが気味が悪いな」と相槌をうつ。俺は不思議に思つて、兄のほうを見たが、彼は父の様子に気づかなかつたらしく、のんきにおかずの芋をついついている。見間違ひだったのかもしれない、そう思い直し「そういえばこの前学校でさ・・・」と自分から話題を切り替えた。

しかし、話はこれで終らなかつた。夕飯の後、部屋で宿題をしていた俺の所へ、珍しく父がやってきた。いつもと違う、真面目な顔。先ほどの一瞬で捕らえた表情と、同じだった。

「どうしたの、父さん？」

あえてのんびりとした声で、シャープペンシルを机の上に転がす。

そうでないと、父の異様な雰囲気呑まれてしまいそうだったから。
「話があるんだ」

よく見ると、彼の顔は血の気が引いて真っ白に近い。何か重大な事が起こってしまったかのような様子であった。

「なに」

墓場の男に関係のある話だろうか。いや、きっとその話だろうと確信していた。何故かは分からないけど。

「墓場の男の事？」

父が言う前に言うとは彼は少し驚いたように頷く。そして、キヨロキヨロと部屋の中を見回し、開いていたカーテンをさつとしめると、身振りだけで付いて来いと俺を促した。何事だろう、不思議に思いつながらも、また好奇心が頭をもたげ始める。だって、父がこんなに深刻な顔をする事はめったに無いことだから。二階にある俺の部屋から一階に降り、母が皿を洗う音を聞きつつ仏間に入った。

「襖を閉めて」

俺は言われた通りに後ろ手に襖を閉め、仏壇の前に正座した父の後ろに座る。畳とジーンズの微かにこすれる音がすると、それが合図だったかのように父が蠟燭に火を灯し線香をあげ静かに手を合わせた。俺も、同じように後ろで合掌し、固く目を閉じた。いきなり何事だろうかと父の背中をうかがいながら。

「冬治」

父はそう言い、脇によけると俺を手招きし、仏壇の正面に座らせる。

「その下の引き出しをあけて、鍵がはいってるから取り出して」
何故、自分でやらないのだろうか。そう思いながらも軽くうなずき、カタリと接続の悪い木の引き出しを開ける。マッチ、蠟燭、ライターが乱雑に入っている奥のほうをあさってみると、いかにも古そうなくすんだ金色の鍵が見えた。

「おう、それだ」

父は横合いから覗き込み、うなずく。摘み上げてみると思ったよ

りは重く、引き出しをしめてからしげしげと眺め回した。いかにも鍵、といったような風体の、今のものとは違う先の丸い鍵。こんなもので開く扉って、今の世の中にあるのだろうか？

「何の鍵？」

「倉庫だよ」

「倉庫？」

「そう。うちの、庭の先にあるだろう。あれの鍵」

小さい頃に遊んだきりで、最近近寄りもしなかった庭先の古い蔵のような倉庫が、突然頭の中に浮かんできた。忘れてしまうほど、庭にでていなかったのかと少し驚く。

「さて、いくぞ」

「は？今から？」

「膳は急げ、時間がどのくらいあるのか父さんにもわからん」

何の時間だよ、そう聞く前に父はさつさとリビングに行き、母に「懐中電灯はどこにあったかな」とのんきな声を出していた。俺は手のひらの上にある鍵を見つめ、そういえば昔一つだけ戸の開かない倉庫があったな、とふいに思い出した。

懐中電灯は結局見つからなかった。キャンプ用のランタンで何とかしようと、探したがこれも見つからず、結局蠟燭に火をともしていくというなんとも原始的な方法と、俺の携帯のライトを使つての行軍となった。

「お前があげるんだぞ、冬冶。俺は何が入ってるか詳しくは知らんからな」

「何が入ってるか？何かあるの？」

真っ暗闇の中で芝の感触を踏みしめながら、父はなんとも頼りない言葉を発する。鼻先を掠めていく、冬の風がどんどん俺のからだの熱を奪っていくのが感じられた。

「曾じいちゃんからの、置き土産だ」

「遺産ってこと？」

「そんな生易しい物だったら良いな」

「はあ？」

「まあ、見てみたらわかる」

「その前に、話を聞かせて欲しかったな」

「話？」

「展開が速すぎてついていけないよ、俺」

ふと父の顔があるところを見上げると、彼の頭越しに冬の星空が見えた。といっても、星はあまり見えず、分かる正座はオリオン座ぐらいしかない。見とれたわけではないが、足を止めると、父も同じように空を見上げ「見事なオリオン座だなあ」とつぶやいた。

「見事なオリオン座って、何だよ。見事じゃない奴があるの？」

父の言葉におもわず噴出すと、彼も笑い

「いや、もしかしたら動き出して配置が換わるかもしれん」

とわざと真面目くさった声で言った。

「実はあれは星じゃなくてユ・フォ・でした、とか？」

「うーん、ありうるぞ。もしかしたら、あそこの話かもしれない」

「何が？」

「今から、お前に話そうと思っている話だよ」

さあ、いくぞと再び歩き出した背中に少し遅れをとり一歩踏み出した。宇宙の話？今日の男と、どこに關係があるのだろうか。まさか、彼は宇宙人？いやいやまさか、それならばどこに曾祖父との關係があるというのだ。いや、もしかしたら海運業をやっていたと言うのはウソで、本当はNASAのような所に勤めていたのかもしれない。「さ、ここだったかな」

枯山水を意識したのだろう、祖父が庭に玉砂利を敷き詰めて作った川を無遠慮にザクザクと踏んでいくと、倉庫についた。記憶の中のそこと、全く変わっておらずまるで昔に戻ったかのような錯覚を覚えてしまう。

「鍵は？」

父の問いに無言で鍵をさしだすと、彼は頷き俺の背中を軽く押した。そして、南京錠のついた扉に蠟燭の火を近づける。黄色い光に照ら

し出され、鈍い光を発する錠前を手に取るとひんやりと金属の冷たさが指先に伝染した。恐る恐る鍵穴に鍵を差し入れると、何年間も放置されていたとは思えないほどすんなりとはまり、ぐるりと右に回すと、ガチャッと音がして錠がはずれた。取手からはずし、鍵と一緒にポケットに入れる。

「俺があけるの？」

振り返り父にそう聞くと、彼は先ほどよりも緊張した面持ちでゆっくりとうなずいた。どこか、おびえているようでさえある父を不思議に思いながらも、俺は戸に手をかけ、一気に押し開けた。とたん、ギシ、と戸のきしむ音がしてパラパラと上から何かが降ってくる。かび臭いにおいと共に、何匹か羽虫が蠟燭の明かりを求めこちらに向かってきた。それをよけつつも、倉庫に入り、携帯のランプで中を照らしてみる。深い闇から浮かび上がってきた空間は、そんなに広くはない。棚が壁に渡されていたが、何も乗っておらず少し進むと足元で何かにつんのめった。

「うわっ・・・なんだ？」

「何かあったか？」

父が倉庫の外側から声をかける。

「箱みたい・・・蠟燭かして」

そう言い手をのばすと、父は俺の手に蠟燭を握らせ、

「その箱をとって、早く家に入ろう」

と言った。その声はやはりどこかおびえたような色が混じっており、蠟燭を手渡した手は小刻みに震えていた。おそらく、寒さのせいではない。

「よい・・・しょっ・・・重」

蠟燭を地面に置き、足元を照らして箱を持ち上げると、意外と重く俺はうんうんと言って倉庫の外に運び出した。箱を父に渡し、蠟燭をとるとすばやく出て戸を閉め、ポケットから南京錠を取り出し元の通りにガチャリと鍵を閉めた。

「よし、戻ろう」

父は箱など持っていないかのように、すすいと進んでいく。俺は蠟燭の火を消さずについていくことに必死で、「まって」とも声をかけられないほどだった。わざといつもは使わない裏口から家中に入り、ほっと一息つくのも束の間、父は箱をそのまま俺の部屋に運ぼうと階段を上っていった。あわてて蠟燭の火を消し、階段をかけあがる。

「それ、何なの」

「知らない」

「知らない？じゃあ、なんでもつてきたの」

「そついわれてたから」

「誰に？」

「曾じいちゃんに」

部屋に入ると父はよいしょ、と言い中央に箱をおろした。箱は、金属で出来た金庫で、扉にダイヤルがついているものだった。こんなに大きな金庫は、初めて見る。二人で金庫の前に腰を下ろし、まじまじとその姿を見つめた。

「中身を先に見たいか、それとも話を先に聞きたい？」

「・・・話！」

何も分からずに金庫の中身を見ても、きつと分からないだろう。首をすこしかしげて父を見ると、彼もうん、と首をかしげていた。

「どこから話せば良いのかなあ」

「なんでも、分かりやすければ何処からでも良い」

何の話かは知らないけれど。

「ひとりの男が関わってるのは確かだ」

「それって、あの墓場の？」

「多分、いや確実にそうだろうな。お父さんは直接見たことが無いんだ」

父は片手でぱりぱりと頭をかくと、薄く目を瞑った。何かを想い出しているようである。

「曾じいちゃんはいつも何かに怯えていた・・・気がする。いや、

そうだなあれは怯えてたというよりも、いつも油断する事がなかったのかな」

「緊張しっぱなしって事？」

「家にいるときはそうでもなかったんだが、一步外にでると人が変わったように厳しい目つきをしてた」

こんな風に、と父が顔をしかめてみせる。ぐっと引き締まった顔は先ほど倉庫に行った時の表情だった。

「それで、いつも平和な世なんて来なければ良いのにつて呟いてたな
「どういう意味？」

曾祖父が生きていた時代は戦争があつていたはずだ。普通なら、平和を望むだろうに。

「わからない」

父が肩を落とし、ため息をついた。俺もそうかと首をかしげ、謎解きは苦手なんだけど、と口をすぼめる。

「まあ、それはおいとこう。たぶんその冬冶が見た男がその曾じいちゃんの恐れていた人物なんだろう、と思う」

「ちよつとまつて、曾じいちゃんの時代の人が生きてるわけないだろ？今からもう100年前の話だ」

墓場で男の口から直接聞いた時は、そんなことはありえないと思つた。しかし今、目の前の父が大真面目に同じことを言っている。

「だから、言つたろう？もしかしたら、空の上の話かもしれないって」

父が、はじめて少し楽しそうに口元に笑みを浮かべた。俺は疑問符を頭の上にたくさん浮かべ、また首をかしげる。

「どういう意味？」

「冬冶、お前が今日話した相手はたぶん人じゃない」

「は？」

「曾じいちゃんが言つてたんだ。『もしかしたらこれからお前かお前の子供の代に私の知人だと言う人が近寄ってくる時があるかもしれない。その時は、この倉庫をあけて、中のものを見てから対処しな

さい。この中のものを見る前にあれに関わってはいかん。いくら話しかけられても無視して、そして十分に備えができてから追い払いなさい。そうじゃないと、お前は食われてしまうよ』って。あの倉庫を閉める時、父さんも見てたんだ。鍵がかけられるところを」

「それでだしたんだね、この箱」

「何が入ってるかは知らないけれど、曾じいちゃんはその男に会ったものだけがこの金庫の中身を見る権利がある、とっていた。お前のじいちゃんの代にも、父さんの前にもそれらしき人は現れなかったから、ウソだと思ってたんだがなあ・・・まさかお前の前に」
「まったく正体がつかめない。曾祖父の時代に生きていた男が現れて、追い払わないと、食われてしまう？まるで時代錯誤の御伽噺だ。」

「父さんは、この話信じてるの？」

普段、この類の話を信じる父親ではない。しかし、聞いたとたん父は大真面目に大きくうなずき、

「あの曾じいちゃんの様子からすると、『冗談ではないと思う』
と言いつつ切った。」

「じゃあ、もし本当だとするよ？」

ここで本当だ、ウソだ、といついても話はすすまない。まだ納得したわけではなかったが、一歩譲って続けることにした。だんだんと、床から寒さがしのびあがってきたので、俺は適当にベッドの上のクッションをとってしりの下に敷く。もう一個とって、父に渡すと要らないとしくさで断られた。

「それで、俺はこの中身をみる権利がある。だけど、父さんは言いつけを守って、中のものを見ないの？」

もし見ないのだったら、俺は自分ひとりで身の危険と闘わなければならなくなる。あまり、というか、かなり自信がない。父はうんと唸り古い金庫をじつと見つめた。

「事態がまだよくわかってないからなんとも言えんが・・・もし見て冬冶に身の危険が増えるんだっから見ない。というか、見てはいけないと禁止されはしたけど、見た本人から話を聞いちゃいけない

とは言われていないだろう？だから、どうとでもなる」

「つまり、助けは期待していいのかな？」

「もちろん。冬冶が食われる事だけは、絶対に避けるぞ」

父は頼もしくうなずき、俺はほっと胸をなでおろした。一人で立ち向かえなんていう親じゃなくて、良かった。

「とりあえず、父さんが知ってる話はここまでだ。曾じいちゃんの知人だという不審な人物が現れたら倉庫の鍵を開けて中の金庫を出すこと。そして中身を見てからその人物を追い払うこと」

「そして、その人物は人ではないって父さんは思ってた、それで俺の前に今日現れた。俺はこの金庫を開ける権利がある」

「そのとおりだ。冬冶」

「何」

「今日のうちにあけて、中の中のをみてみなさい。明日から、何が起こるかわからん」

そういった父の顔は、蒼白だった。俺の身を案じているのだろうか。「大丈夫だよ」

俺はわざと明るい声をだし、にこりと大きく笑ってみせた。まだ事態もよく飲み込めていないのに、そんな顔をされても困る。だいたい、いきなりこんなウソのような話を信じるといわれたほうが無理な話なのだ。

「さ、あけてみるから、父さんテレビでも見といて。番号は？」

金庫の前に行き、ダイヤルに手をかけると、父は立ち上がり短く息を吐き出す。

「19001513だ。やり方、わかるな？」

「わかるさ、このくらい」

「じゃあ、何かあったらよびなさい」

「うん」

「それと、この事は父さんと冬冶以外は知らないからな」

「母さんも？」

「勿論だ」

短く告げると、父は部屋のドアを閉めた。廊下を歩く足音が遠ざかっていく。

「さて」

俺は金庫に向き直り、ダイヤルを父が言った通りに回した。カチカチカチという音がして最後に一際大きくカチ、という音を確認すると、恐る恐る取手に手をかける。まさか、人外のものなんて、うそだろう。食われるというのは比喻で、曾じいちゃんの知人と言ってくるのはなにか曾じいちゃんに代々の恨みがあつて、それで被害が俺たちに及んだ時の対処法としてこれを残したのだ。例えば、あの墓場の男はヤクザかなんかで、曾じいちゃんが仕事をしていた時に何か因縁をつけられたのだ。それで、ずっと恨んでいる、うん、これはこれで結構恐ろしい。

覚悟を決め俺は取手をぐい、と手前に引いた。少し埃が舞い軽く軋んで扉が開く。何か中から飛び出してきやしないかと恐れつつも覗くと、そこにあつたのは何冊かの古びたノートだった。上の一冊を手に取り、薄く積もった埃をはらう。古めかしい大学ノートだ。表紙に大きく「其之一」と書いてある。親指と人差し指でそつとそれをめくると薄い灰色の中表紙が現れた。それもめくると次のページには鉛筆でぎつしりと文字が書き並べてあり、一番上に赤鉛筆で他言無用と大きく書いてある。曾祖父の手だ。カタカナと漢字の混じった文章は見るからに読みにくそうで、しかし全く読めないという程ではない。横書きでつながっている文字が少ないのはきつと未来の俺達の為に考慮したものだろう、と思う。たんに、縦書きのノートがなかったかもしれないが。

「他言無用。コレハ我が人生ニオイテノ秘密ト成功ノ記録デアル。今之ヲ見テイルダラフ君ハ我が孫デアルノカ、ハタマタ息子カ、ソレトモ遠イ子孫ダラウカ。ナンニセヨ、アレガ現レタノダラウ。ソレニツイテノ事ヲ語ラネバナルマイ。」

几帳面な字面だった。俺は曾祖父がどんな人物だったのか、まっ

たく知らない。けれども並ぶ文字を見て、どことなく神経質そうなイメージをうけた。

「マズハ私ノ下積ミ時代カラ記ス事ニシヨウ。全テノ根源ハ此処ニ在リ、私ガマダ壱五歳ノ頃ノ事デアル」

いきなり本題に踏み込もうとしている文章を見るのをやめ、俺はとりあえず金庫の中のノートを手を全て取り出すことにした。冊数は、全部で八冊。全部パラパラと目を通してみると、最後のほうは走り書きのような短文がいくつも並ぶ形となっていた。これは、一から全部読めということだろうか。俺は時計をみた。八時三十八分。明日は学校があるから、せめて十二時までには寝ないと翌日こたえてしまう。八冊とも読み終えるのは、多分無理だろう。まだ宿題も終わっていないのに。少し考えてから、とりあえず宿題を片付けることにした。命がかかっているかもしれないからノートを読め、といわれてもこの平和な世の中であまり信じがたいことだ。昼間の男は気持ちが悪かったけど、それでもただの変質者という可能性もまだある。それならば、現実的な問題で、明日が提出期限の宿題を第一に片付けたほうが良い。ノートのことは、すべて終わって落ち着いてから考えよう。決まると行動は早く、もう一度金庫の中にノートを収め、ガチャンと扉をしめた。そして机に広げたままにしてある宿題にとりかかる。

しばらくすると、インターホンが鳴り、母が風呂だとつけてきた。一階のリビングから叫んでも、二階の部屋には声が届かない。だから、各部屋には一つずつ、インターホンがとりつけてある。機械越しに返事をして、それから風呂場へと直行した。父にあつて、詮索をされたくない。なんていったって、まだなんの説明もできない状態なのだから。風呂場に入ると、中の窓が開いていた。どおりで、冷たい風が入り込んでいたわけだ。俺は湯船のふたを開ける前に、窓を閉めようとして手を伸ばした。

「・・・？」

暗闇の中、何か二つキラリと光る物が見えた気がした。見間違

かと思いよく目を凝らしてみると、家の塀の外に、ぼうつと人影が浮かび上がる。こんな時間に、何故こんな所に人が立っているのだろう。不思議に思いつつも、自分が全裸だったことを思い出し、さっと窓を閉めようとしたそのとき。

「やあ、逃げるとは失礼じゃないか」

声を、発した。ドクン、と一拍心臓が大きく脈打ちさつと全身に鳥肌がたつ。窓をしめようとした手は止まり、目をそらしたいのに闇の中の人型から目がそらせない。間違いない、この声は昼間の墓場の男の声だ。

「そんな育てられ方をしたのかな？」

変質者、ぱつとそんな言葉が頭の片隅で浮かんた。何故、家まで知っているのだ。今日あれだけ追いかけられないか用心して帰ったはずなのに。いや、本当に曾祖父の代からの

知り合いならば、家ぐらい知っていて当然なのか？しかし、俺の立てた仮説でいくならば、何故こんな風呂場にあらわれるのだ。堂々と、玄関からくればよいのに。

「父さん!!」

気づいたら、夢中でそうさけんでいた。怖い。気味が悪い。あの男はなんなのだ。変質者か？どこか頭がおかしくなっているのだろうか？それとも、もしかしたら、本当に・・・

「どうした!？」

父が、急いで風呂場に駆け込んできた。俺はその音でやっと男から目をそらすことが出来、助けを請うように必死の形相の父を見た。「あそこ!あそこにあいつが!」

窓に駆け寄った父の後ろからそつとのぞくと、先ほどまであった人影は消え、ただただ濃い闇ばかりがあった。まさか、そんな

「消えた・・・」

もしかしたらそこらへんに隠れているのかもしれない、そう思いじつと目を凝らして見回したが、男は完全にいなくなっていた。

「冬治」

父の呼びかけにはつとして、俺はさすがのように彼を見た。

「違うよ！うそじゃない！本当にいたんだ！」

まるで小さい子供のように主張する。父は俺を見て、にっこりと笑った。

「ああ、わかった。いたんだな？」

「信じてくれるの？」

「もちろん。しかし、困ったな」

「消えちゃった・・・」

父はうん、とうなずき窓を閉めるととりあえずお前は風呂に入きなさい、と俺の頭を優しくなでた。

「外をちよつと見てくる」

「やめなよ、父さん！あいつ、気持ち悪い」

「だからだよ。男の子だったからよかったが、女の子だったら警察沙汰だ」

そう言い風呂場を出て行こうとする父を、俺は本気で引きとめようとした。

「駄目だ、父さん、今外に出たら何されるかわかんないよ！」

「大丈夫、木刀もっていくから」

「それでも駄目だ。絶対やめてくれ」

ただの変質者じゃない。もしかしたら、本当に父の言うとおり人ではないものかもしれない。とりあえず、今外に絶対に出てはいけない気がした。家の中とて安全かどうか分からないが、闇の中よりましだと思った。

「曾じいちゃんもいつてたろ？金庫の中のものを確かめるまでは、

あいつの相手はしちや駄目だって」

「金庫の中、みたのか？」

父の問いに、言葉が詰まった。正直に、ノートが入っていてそれに曾祖父の書いた記録らしき物が残っていたというべきであろうか。「見たけど、まだ何もいえない」

考えた末、小さくつぶやくようにしてそう答えた。すると父はそ

うか、と言い、

「外にはでない。何かあったらまたすぐに呼ぶんだぞ」

と風呂場のドアをしめた。独りになった瞬間、また窓の外が気になり始める。しかしあけてみる勇氣は無く、あの声が聞こえてくる前に手っ取り早く風呂を済ませてしまふことにした。寒かったけれども、湯船にはつからないでおこう。

宿題なんて悠長な事を言っている事態ではなかったのかもしれない。すぐに、ノートを見るべきだった。五分で体を洗い終り、ザバリと湯をかぶってあがった。体は全く温まっていなかったが、しょうがない。怖いのだ。リビングへ行くと父と母が並んでテレビを見ていた。母は心配そうにこちらを見て「あんたゴキブリぐらいでさわいでちゃ、一人暮らしてきないわよ？」と言う。どうやら、父が巧くウソをついてくれていたらしい。軽くうなずくと俺はすぐに階段を駆け上がり廊下の全ての窓の外を見ずに部屋へと駆け込んだ。部屋のカーテンは全てしまっており、ほっとする。ドアを閉め、鍵をかけて金庫のふたを急いで開け中のノートを全て引っ張り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9685p/>

後払いの契約

2011年1月5日20時10分発行